

## ヤング・パワー

中嶋 竜三 (法政大学)

最近の大学騒動、高校紛争、街頭での革命ごっこに見られる青年の行動はいろいろと批判されているが、実際に彼等の一部と接触のある筆者にとつてただ一つ感歎させられることは、彼等の素晴らしい“若さ”である。全体的に勢力すでに衰えたりと報道されている昨今でも、一人々々の過激派学生の発散するエネルギーは実に驚くべきものがある。それは電車の中などで接する一般の青年や教室で接する一般学生にも或程度感じないことはないが、過激派学生のそれは遙かに迫力をもっている。しかしながら何か或る計算をしようとして一生懸命になつていた頃の我々も、そのくらいのエネルギーをもっていたのではないかと考えると、今更ながら自分自身の精神力の衰えを痛感せざるを得ない。

核データ研究室は発足して一年半だが、シグマ委員会はそろそろ満7才になろうとしている。委員会が誕生して1~2年の間は、核データの評価と整備という一つの目的に向つて大なる熱意を燃やしていたと自負しているが、同時に7才になろうとしている現在、主として本務の方の事情によるのだが、新鮮なエネルギーを失ないかけているのではないかと反省もしている。この自負や反省よりも、その反省を実行に移すことが大切なことはわかりきつたことだが、筆者自身が今の若い学生たちについていけないのと同じように、委員会がこの7年間に敷設されたレールから脱線してまでも斬新な途を開拓していくのはかなり困難のように思う。幸いにも核データ研究室(もしばらくしたら核データ・センターになるだろうと期待されるが)は若い。これがシグマ委員会に対するいわばヤング・パワーとなつて、日本の或いは世界の核データ分野にセンセーションを捲きおこしてくれる可能性がある。

社会秩序の紛争や学校の解体を叫ぶ過激派学生のように、核データ分野のヤング・パワーが余りにも暴走してしまつては困るが、その若さと、幾多の苦難を克服しようとする行動とは見習つて(?) 貰いたいと考える。古いものにつけ加えて、あるいはそれを打破して新しいものを打ちたてることは、何もないうところに新しいものをつくることよりも難かしい場合がある。それができるのはヤング・パワー以外にはないのではなからうか。